

急激な変化の中で

こども教育学部 本山 益子

先日、「教育における生成系 AI の活用と注意」をテーマとした FD 研修会が実施された。その中で、「ChatGPT は 5 日間で 100 万人のユーザー登録があり、2 ヶ月で 1 億人を記録した」と述べられているように、2020 年 11 月に公開されて以来、めまぐるしい勢いで活用されるようになってきている。小学生を対象とした夏休みの宿題対策としての提供も見られるようである。

2003 年、非常勤先の「身体コミュニケーション論」の講義において、「目の前の子どもが声をかけても生返事で、携帯電話の先の人間とのコミュニケーションに没頭する親」への問題意識が書かれたコメントカードが、今となっては非常に懐かしく思い出される。2007 年にスマホが誕生すると、文字でのやりとりが主流となり「からだ」不在と言える状況となった。また、何でもスマホが教えてくれるため、人に聞く（コミュニケーション）ことが不要となっただけでなく、調べることで済むようになり、自分で考える機会も減ったように感じる。さらに、今回、生成系 AI の登場により、知的創造の世界をも委ねることが可能になるようだ。

スマホが必需品になったように、早晚、生成系 AI は私たちの生活において普通に活用されるのだろう。しかし、梅干しが酸っぱいことは情報として持っけていても、その酸っぱさを AI はわかっていない。この人間との違いを改めて認識する必要があるのではないだろうか。つまり、私たちが持っているこの身体的感覚を、学生には今こそ再認識して欲しいと考える。保育・教育現場は、そこに存在する「からだ」が生きる場である。このような場においては、「からだ」の活用は必要不可欠であり、保育者や教員の身体性が問われているのである。

このようなことを考えつつ、「こども教育学演習」では「からだ」をテーマとしたゼミを実施している。自分の身体のリラックスを体験し、自己の「からだ」を感じて欲しい。身体部位の名前、身体部位の動きや働き、身体部位の入った熟語や慣用句・ことわざを調べ、改めて身体を意識し向き合っけて欲しい。「からだ」に関する資料や文献に触れ、便利になったことによる「からだ」への影響を認識して欲しい。そして、保育者として、からだで感じ・からだを動かし・からだに関わることの重要性を実感し、子どもと一緒に実践して欲しいと願っている。

今後も、世の中は便利になり、益々多様に変化していくであろう。しかし、メルロ・ポンティが「私は身体である」と言っているように、私たちが「からだ」として存在し続けることは永遠に変わらない。したがって、教育においては、自己の「からだ」を意識し多様に活用することの重要性を、ぶれることなく訴え、実践したいと考える。今回寄せられた原稿の中にも、そのような身体性が感じられる研究があったことをうれしく思うとともに、引き続き「からだ」を通じた教育・研究を大切にしていきたい。